

YOSIZAKA TAKAMASA Panorama World: from life-size to the earth

ひげから地球へ、パノラマみる



吉阪隆正展

2022.3.19.sat → 6.19.sun

北京頤和園でスケッチをする吉阪
1976
撮影：鈴木 尚



第4章：山岳・雪氷・建築

Mountains, Snow and Ice, Architecture

幼少期にスイスで初めて登山を経験した吉阪は、山行に熱中し、早稲田大学の山岳部へと活動をひろげていきました。さらにはアフリカ大陸横断とキリマンジャロ登山や北米大陸横断、マッキンリー*登山などの探検隊を組織し踏破する功績などを残し、建築以上に熱心に取り組んだとも言われています。命を懸けて体得した自然からの知見は、寒冷地帯における農村民家の研究や雪氷の研究などにも発展し、最終的に厳しい自然に抗わない、独特の建築を生み出すこととなりました。1955年からヒマラヤ山脈のK2登頂を人生の目標としていた吉阪でしたが、残念ながら達成することはできずに1980年に急逝。その後、吉阪の遺志を受け継いだ早稲田大学登山隊が奮闘し、1982年にK2登頂を果たしました。本章では、なによりも山を愛した吉阪と、山とのつながりで集まったU研究室のメンバーが設計から現場まで取り組んだ、厳しい自然と向き合う山岳建築の数々を模型や図面で展示します。その中でも、雪が屋根に積もらないようにドーム型の形状をした《黒沢池ヒュütte》は、その特徴的な構造を1/3スケールで再現しました。

(*現在の正式な呼称はデナリ)



第1章：出発点

Starting Point

本章では吉阪隆正の誕生から、幼少期にスイスで受けた平和教育、今和次郎に師事した学生時代の大陸との出会い、ル・コルビュジエとの師弟関係などを、年表を軸として紹介します。吉阪隆正は1917年、内務官僚であった吉阪俊蔵と、動物学者・著作佳吉の次女、花子の長男として東京小石川区に生まれました。1920年～32年までに家族と共に二度のスイス生活とイギリス留学を経験し、欧州での国際的な平和教育を受け、語学力を身に付けて帰国。早稲田大学高等学院、早稲田大学に進学しました。第二次世界大戦中に応召を受けて赴いた中国大陸では、「相互理解と平和のために建築に取り組む」と将来への決意の言葉を記しています。終戦後は、焼け野原となっていた新宿区百人町の自宅跡地に自らバラックを建て、復興へと踏み出します。フランスへの留学を経て、教育者として早稲田大学で教鞭を執り、並行して執筆活動や建築設計、そして地域計画へと活動の幅を広げていきました。40歳からはアフリカ大陸横断、北米大陸横断、2年間のアルゼンチン赴任、インドや中国との国境を越えた交流を行いました。その地球を巡るダイナミックな活動の軌跡を辿ります。フランス留学、アルゼンチン赴任、大陸との出会いと、吉阪は節目ごとに私家版の書籍を出版しています。ここでは、アルゼンチンの神話を描いた《宇為火タチノオハナシ》をメビウスの輪として展示しています。



第5章：原始境から文明境へ

From Primitive Border to Civilized Border

吉阪は集印帖を常に携帯し、ペンで写生をして絵具で彩色をしていました。どこに行っても背筋を伸ばし、対象を定めて描いたスケッチからは、独特の風景を見る視点、人々の生活や暮らしへの眼差し、色や造形を捉える感性を感じることが出来ます。屏風折りに小さく折り畳んだ紙を自在にひろげることができる集印帖のスケッチブックを、吉阪はパタパタと呼び愛用していました。このパタパタに描くスケッチのスタイルは父・俊蔵から受け継いだものです。U研究室では吉阪が旅から戻ると、現地のお酒とともにその場にひろげられたスケッチを見ながら、旅の話を聞くことがなによりも楽しい時間だったといえます。吉阪の《パタパタスケッチ》は、現在国内で描かれたものが64冊、海外のものが76冊遺されています。本章では北米大陸横断とアフリカ大陸横断の探検紀行をはじめとする世界中を旅した記録と、パノラマの《パタパタスケッチ》を展示します。



第2章：ある住居

YOSIZAKA House

1960年、吉阪は新宿区百人町の《吉阪自邸》建設の経緯から完成までの過程についてまとめた『ある住居』と題する小さな書籍を出版しました。少年期から住んでいた家は戦災で焼失しました。戦地から引き上げてきた吉阪はそこにバラックを建てて生活を始めます。1950年から2年間、突然決まったフランス留学とル・コルビュジエのアトリエで設計活動をする中、吉阪は百人町に建築する新しい住宅の計画を始めました。帰国後すぐに設計、着工し、約2年をかけて完成した《吉阪自邸》は、日本で初めての人工土地を持つコンクリート住宅です。完成したこの自邸には国立西洋美術館建設のために来日したル・コルビュジエも訪れました。1962年には、庭にU研究室アトリエを設置し、門も扉もない吉阪邸の自由な空間には学生や様々な建築家、海外からの訪問者も数多く集まりました。本章では、吉阪自邸と庭を1/1サイズで再現展示しています。万人に開放されていた庭部分には、吉阪の著書やゆかりの品々を展示しました。世界を駆け巡る吉阪の原点であり、設計活動の拠点でもある「吉阪邸」を通し、“大地は万人のものだ”という吉阪の建築思想を伝えます。



第6章：あそびのすすめ

Recommendation to Play

好きなものはやらずにいられない、生きるか死ぬか生命力を賭けて
(1980年)

吉阪は寝食を忘れて好きなことに打ち込む「本気のあそび」を実践していました。自身を「アルキテクトー歩きテクト」を称して建築をつくり、まちを歩き、山に登り、人を育て、相互理解と平和のための《有形学》を提唱し、地球を駆け巡る旅をしました。そして、吉阪は身につけ、手に取ることの出来る小さなもの、指輪やループタイ、メダルなどをデザインして、自分の手でスケッチや図面を描き、油土で模型をつくりました。建築の設計でもタイル割り付けの模様や手摺、ドアの押手、家具や数字のサインやシンボルマークなどのデザインに至るまで、遊びごころあふれる作品を多数手がけています。日常の中に見出す何気ないものや旅先で見つけた石ころなどを注意深く観察する姿勢は、吉阪のデザインの「楽しさ」の根底を築いています。また《メビウスの輪》や《サイコロ地図》、《一筆書き》などに森羅万象の原理を見出し、メモの裏などに数多くのダイアグラムを描きました。本章では、旅先や街中で描き続けた《パタパタスケッチ》によって旅の跡をたどるとともに、ダイアグラムや愛用品を展示しています。



第3章：建築の発想

The Idea of Architecture

《浦邸》の設計をはじめた1954年、設計活動に大竹 十一が参加したことから2人は生涯に渡る協業パートナーとなり、集まった5人の創設メンバーで「吉阪研究室」の設計活動はスタートしました。住宅の設計から《ヴェネチア・ビエンナーレ日本館》をはじめ、学校、市庁舎など公共建築まで、意欲的に発表していきます。有機的な造形を持ったコンクリート表現は、同時代の他の建築家にはない特徴のあるものとなりました。また「モデュロール」のスケールの展開など、ル・コルビュジエから受け継いだ自由な設計思想の実践も見られます。1960年代には「U研究室」と改組。吉阪を中心として集まった個性豊かなメンバーが増えていきます。一人ひとりが独立してアイデアを提案する《不連続統一体》理論を実践する組織では、模型を囲んでディスカッションを重ねて形を発見していきます。なによりも地形を活かして自然と向き合う方法と、ものと人のつながりを1/1の現寸で考えるディテールが大きな特徴といえます。本章では、吉阪隆正とU研究室が設計した代表的な建築を、手描きの図面と写真で紹介し、またコンクリート構造を表現した模型によって、完成した建築の外観からは読み解くことが難しい建築の骨格を再現し、人工土地の組み立てをたどります。



第7章：有形学へ

To Iukeiology

1966年、都市計画の研究を行う研究室として早稲田大学大学院に新たに設立された吉阪研究室は、主に都市や農村地域のフィールドワークや研究、計画を行いました。吉阪は《有形学》や《発見的な方法》などの独自の理論を展開し、「都市が人をつくるのではなく、人が都市をつくる」との理念から「列島改造」やメガロポリスの台頭とともに進行していた都市の人口爆発や環境汚染、無秩序な開発による地域コミュニティの崩壊、農村の過疎化問題、そして防災への視点など、当時の社会状況を深く掘り下げて分析し、ときに人間の暮らしの原点に立ち返りながら、社会に対し提案し続けました。本章では、都市計画研究室としての出発点となった《大島元町計画》や学問分野を超えた早稲田大学グループによる《21世紀の日本列島像》、《東京計画》の提案をはじめ、これまで展覧会で紹介されることが少なかった東京、仙台、津軽、そして韓国や農村での調査など、1965～80年までに様々な地域で実施された調査やプロジェクトを総覧します。人類が平和に暮らせることをめざした《有形学》を基に、マイクロからマクロまで、スケールを自在に変化させながら提案されたユニークな計画の数々からは、これからの未来を考えるための新たな発見を含んでいることでしょう。





「専門」の枠にとらわらず、建築や都市の可能性も一般の人にわかりやすく伝えようとした吉阪隆正。その姿勢にならって、展覧会の会場も「パノラミ」まち。

TAKAMASA YOSIZAKA 1917-1980

YOSIZAKA TAKAMASA Panorama World: from life-size to the earth

吉阪隆正展：ひげから地球へ、パノラミ

展示構成 アルキテクト：嶋田幸男、齊藤祐子、吉江 俊、北田写真事務所、Echelle-1、paper studio

会場は「東京都現代美術館」(1995年開館)。

設計者は吉阪隆正ではなく、柳澤孝尚(1935-2017)。偶然だけども、どちらも「T.Y.」。

「パノラミ」展の会場をパノラミ

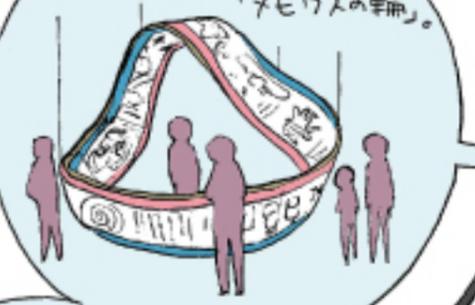
入り口は1階

最後のエリアは、エントランスホールからも見えます。

おまけ会場内で、こくも探そう!

乾燥なぐじ by吉阪隆正

最初のびらくり展示は、宙に浮かぶ「メビウスの輪」。



吉阪が書いた童話が表から裏へと途切ゆるこもよく続く。童話は、アンデスの神話を描いた『宇為火タチノオハナシ』。

生い立ちや活動から、徐々に建築の展示へ。

90作「大学セミナーハウス」は、巨大な粘土模型で。

がまやアビエナール日本館の構造模型

建築好きはぜひ11号子と実物を見てほしい!

最後は、語りかけるここの少ない、吉阪の「都市」への提案もいくつか。



吉阪版の「東京計画」は、山手線の内側がすべて森。丹下健三とは対極。

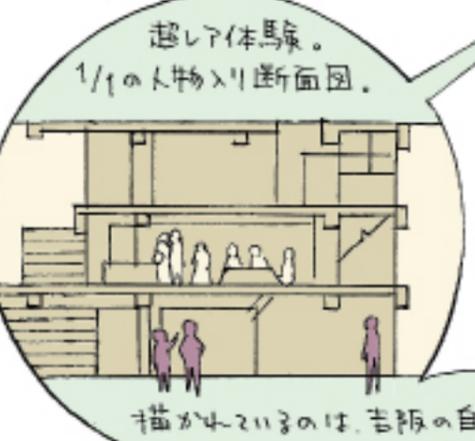
集印帖に描かれたスケッチ。



そうか、早稲田大学の建築家に、集印帖も使う人がタガの吉阪の影響だったのか!

さあ、ラストコーナー。

超レア体験。1/1の人物入り断面図。



等身木パネル with トラ。撮影OK!

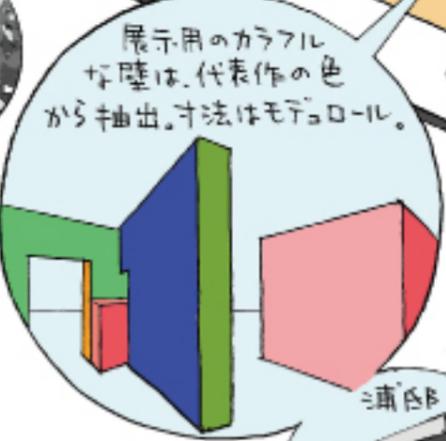
描かれた211号のは、吉阪の自邸。

天井ギリギリまで使った、自邸の1階から3階までを原寸展示。



おま、ニリキ!!!

展示用のカラフルな壁は、代表作の色から抽出。寸法はモジュール。



ここからは、代表作の展示がどっさり。



なごなご。コンクリートでつくった構造の模型もあり。

山岳建築エリア

何だこりは!? 木造立体遊具?



実物はこの3倍。



山岳建築エリアがワクワクする!

おまけ 遊具スケッチ

宮沢 洋
建築家、前・日経アーキテクチャ編集長。
1967年生まれ、早稲田大学政治経済学部卒。
Office Bangs 共同主宰